杉並区立
浜田山小学校

学校だより　第545号
令和２年度　12 月号

はまだやま

校　長　　伊勢　明子
副校長　　森賀　慎一

「ミライの授業」

副校長　　森賀　慎一

２学期も残り一か月を過ぎました。先月は高学年の体育学習発表会が行われました。５年生のソーラン節、６年生のアルティメット等、浜田山小の高学年として、他学年の良き手本となる姿を見せてくれました。参観に来られた皆様に、心より感謝申し上げます。

さて、学校だより 10 月号の巻頭で浜田山小の先生方の「よい授業」に向けた取組を紹介しましたが、今回の「ミライの授業」は、ちょっと違った内容です。日本教育新聞にこの「ミライの授業」という本が紹介されていて、そういえば我が家の本棚の未読コーナーにあったなと思い、帰宅後に見付けて読んでみたらとても面白い本だったので、紹介を兼ねて話題にさせていただきます。著者は京都大学で教鞭をとられていた瀧本哲史さんです。過去形なのは、昨年の８月に逝去されているからです。

この本は「14 歳のきみたちへ」という趣向で書かれていて、浜田山小の子どもたちならこのメッセージを理解できるのではないかと私は思っています。そしてここには、未来の授業がどうなっているか…などが書かれているわけではなく、「未来をつくる ５ つの法則」というのが分かりやすく書かれているのです。その詳しい内容については紙面の関係で紹介できないので、最初のガイダンスという章に書かれている「きみたちはなぜ学ぶのか？」に触れていきます。

私たち大人は、この「なぜ学ぶのか(勉強するのか)？」という問いに対して、子どもたちに明確でわかりやすい答えをもっているでしょうか…。瀧本さんは「勉強そのものが嫌いなのではなく、勉強というやる意味がわからないものをやらされることが嫌い」なのではと問いかけています。そして子どもたちが学んでいるものの正体を「魔法」と言っています。今当たり前に暮らしている 21 世紀はスマホを始め、昔の人から見たら魔法の国なので、学校という場所で「魔法の基礎」を学んでいると説明しています。どんな大発見も大発明も、すべては学校で学ぶ知識をベースに成し遂げられたと説き、「学校とは、未来と希望の工場である」と言い切っています。そしてニュートンが万有引力の法則等を微積分学という「数学」で説明したことや、フランシス・ベーコンという人が「観察と実験」の大切さを主張し、事実を踏まえて理論や結論を導き出す「帰納法」を広め、これが近代科学の基礎となった例を示しています。この章の最後には、「本気で未来をつくろうと思うなら、過去を知る必要がある」と述べ、「歴史」を学ぶことの意味も伝えています。

大人の私でさえ、この本を読みながら「もっと勉強したい、学びたい」とわくわくした気持ちになりました。この本を子どもたちにプレゼントするのもいいですが、学校や家庭・地域で子どもたちに「学ぶ楽しさや喜び」をもっともっと味わえるようにしていく必要があるなと感じています。浜田山小では授業を中心とした教育活動全般で、それらを伝えていきます。家庭や地域の皆様にもご協力いただき、そんな魅力ある授業づくりに一緒に取り組んでいただけると幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

―　１２月の生活目標　―　【整とん名人になろう　物を大切にしよう】

12月に入ると、寒さも一段と厳しくなり上着などの防寒具を着用して登校するようになります。また、2学期も終わりに近付き、児童の机やロッカーには多くの物が保管されていると思います。自分の管理するものが増えるからか、職員室には記名がない落とし物が多く届けられています。（落としたことに気が付かないことが多いようです。）

2学期も残りわずかです。「自分の持ち物に記名し、大切に扱うことができただろうか」、「身の回りの整理・整頓を意識できただろうか」、「みんなで使う場所や物を大切に使うことができただろうか」など、学校生活を振り返り、気持ちよく生活できるようにしていきたいと思います。3学期は今以上に、自分のものやみんなで使うものを大切にする心を意識させ、学校全体で整理・整頓にすすんで取り組むことができるようにしていきます。